

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2192600142		
法人名	社会福祉法人 新生会		
事業所名	リハビリセンター白鳥		
所在地	岐阜県揖斐郡池田町白鳥386番地		
自己評価作成日	平成31年1月4日	評価結果市町村受理日	平成31年4月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.nhl.w.go.jp/21/i/ndex.php?acti%on%kouhou%detail%022%kani%true&I%gvsyoQ%2192600142-008%Servi%ceQ%320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 旅人とたいようの会		
所在地	岐阜県大垣市伝馬町110番地		
訪問調査日	平成31年2月25日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

リハビリセンター白鳥の周りは、田園風景が広がり、窓から眺める四季折々の景色は利用者の話に花を咲かせています。施設には、特養・ショートステイ・デイ・カフェがあり自由に行き来出来る為、一緒にレクリエーションに参加するなど活動を行っています。その為、グループホームの狭い環境に合わない時には、場所を換え特養やデイのフロアに行き居心地の良い環境を整えています。職員同士も声を掛け合いながら、利用者の居場所確認を行っています。レクリエーションではボランティアの方も多く、一緒になって作業や歌や演奏を披露する場となり、楽しめています。毎年行われている陽の里祭では、サンビレッジ国際医療福祉専門学校と共に、地域の方も一緒に参加出来る企画を考え参加している。池田町在住の方を対象に、パワーリハビリを毎日行っており、パワーリハビリの利用者と入所者との繋がりもある事で、社会性の継続が出来ている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念に基づいた白鳥十ヶ条や利用者を尊重した声かけや対応を言語化したカレンダーを作成し、日々のケアで実践している。言葉遣いは特に注意し、「今飛んだよ、飛びそうだよ」と利用者に気づかれずに、暗号で職員同士が注意し合う体制にしている。併設する事業所、カフェや介護予防教室に自由に行き来できるようにして、他事業所の利用者や住民と触れ合う機会を作り、毎日の過ごし方が自分で選択できるようにしている。洗濯物のハンガー掛け・畳み、タオル畳み等の出来る事で役割を担ってもらう支援もしている。最期まで今までの生活が継続できるように各専門職が連携し看取り体制を整えている。法人内の事業所巡り、交換留学の研修、チャレンジシートの活用、職員を育てる仕組みがあり資質向上に努めている事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	白鳥十ヶ条、新生会カレンダーの項目を一つ取り上げ全体朝礼にて、スタッフが自分の言葉で語録を読み解き、日々のケアに生かしていく実践を行っている。	法人としての理念を基に作成した白鳥十ヶ条、職員からの言葉を集め作った日めくりカレンダーの一文を毎日の朝礼で確認している。法人としての目標は実践しているが、事業所独自の理念を振り返る機会がない。	事業所独自の理念についての確認や話し合いの機会を作り、職員で共有していく方策の取り組みが望まれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	白鳥区の回覧板を施設内に掲示し利用者と一緒に地域の動きを把握している。地区の子ども神輿の休憩場として受け入れたり、元日の白鳥神楽の来苑を実施して頂いたり、地区のサロン等へ出張勉強会等も行っている。	小中高生の福祉体験、専門学校生の実習や各種のボランティアが来所し、住民から野菜や花をもらう等交流がある。法人の便りは地域掲示板、事業所通信はカフェに掲示し、事業所の取り組みを伝えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	福祉教育の一環で小・中・高校生の見学や職場体験の受け入れを行っている。毎年行っている「陽の里祭り」の際には中学・高校生のボランティアを集い、サンビレッジ国際医療福祉専門学校と共同して地域に向けたイベントを開催し施設の理解を促している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回、区長、役場福祉課の職員、専門学校校長、メディカル、利用者家族、利用者と運営推進委員会を開催している。利用者の状態報告、地区のイベントを共有し運営についての助言を頂いている。	会議では、事業所の現状報告をし、地域の代表者から行事の情報もらい外出につなげている。イベントで使用する道具について意見があり、改善を行った。不参加となった家族には、議事録を送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進委員会において日頃の活動、リスクを報告し客観的に行政職員から意見を頂いている。また、会議だけではなく行事(流しソーメン)にも参加を促し、利用者の声を直接聞いてもらえるようにもしている。	施設長が介護認定審査委員、管理者が認知症推進委員に就任し、常に実情を伝えている。町の予防事業を受託しており、必要時に電話やメールにて相談している。町主催の会議や研修に参加し、情報交換している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月身体拘束防止委員会を開催し身体拘束と言われる行為がないかを確認合っている。「ひやり・はっと」の振り返りから職員のストレス具合を確認し、職員の見守り方法を検討している。	玄関は施錠せず、併設の他事業所内も自由に行き来できるようにして、見守りする体制にしている。ベッド柵の使用について、アセスメントとフローチャートで確認し、身体拘束にならない方法を職員で話し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	会議等の勉強会で理解を深めると共に、新生語録や白鳥十ヶ条を用いて利用者主体のケアが実践できる仕掛けを作っている。このことにより各スタッフが基本に立ち返る事が定期的に出てくる。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在権利擁護を活用している利用者はいないが、今後必要に応じて関係機関の紹介等を行っていく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の際には本人・ご家族と一緒に契約書の中身を理解できるよう時間をかけて説明を行っている。当法人の理念や施設利用時におけるリスク等も説明。入所後も家族と共に支援していく事を念頭にしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族面会時には必ずスタッフが近況を報告するようにし、また本人と家族が共にゆっくりと時間を過ごせるように環境に配慮している。ご意見箱の設置・外部評価委員による「よろず相談」の機会を設け家族の意向がきける仕組みづくりを行っている。	家族の来所時は職員が声かけし、近況報告をして要望を聞いている。家族交流会や事業所の祭は、案内やチラシを送付し参加しやすくしている。「歩行訓練して欲しい」との要望に、リスクを伝え介護計画につなげ支援した。「牛乳飲みたい」に宅配利用で叶えた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	言われ仕事ではなく各スタッフが自ら考え実行できることを目指し、スター制度に取り組んだり、各委員会活動を設け、管理者と一緒に施設運営ができる取り組みを実施している。	各種委員会、毎月の会議や日常業務のなかで、職員の意見や提案を聞いている。事業所巡り、法人内意見交換会に出席し、日常での声かけの統一を図っている。職員の介護負担軽減に向けリフト移乗機を導入した。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自己評価シート、チャレンジシート等を活用し人事考課を取り入れている。各スタッフとの面談を通じて目標の確認を行っている。来年度からはキャリアアップ制度をもとに更なるステップアップができる仕組みを実践していく予定である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内のスキルアップ研修の活用、当法人ないのNPO法人から定期的に勉強会を企画運営している。日常でも福祉教育や同法人の専門学校の子生への指導等を通じて各スタッフが自身の専門性を伝えていく中で自身のスキルアップに繋がっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	法人としていくつかの姉妹提携施設との交換研修会を行い自己研鑽を図っている。また、年に1度事例発表会を実施し法人内だけではなく全国の施設から招待事例を招き情報交換等を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問で生活状況・課題の把握に努めている。利用者によっては入所前にデイサービスやショートステイ等の利用を進め人的・物的環境にも慣れてもらうような優しい住み替えの提案も行っている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	施設での役割・家族の役割を明確にするために、入所時はオリエンテーションを実施するようにしている。契約時にはこれまでの生活の様子や今後の希望などを聞き取るようにし、入所後の家族と本人、施設との関係性が良好となる様丁寧な説明を心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人・家族から日常生活の困りごとの聞き取りを行い、入所だけではなくその時点で必要と思われるサービスの提案を実施している。当初は入所しかないと思われていた方も在宅サービスの導入によって在宅生活が継続できるケースも多い。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	強みシートを活用しご本人の生活歴を把握し本人のやりたい事をサポートできるように心がけている。グループホームというこじんまりとした空間の中で洗濯物を畳んだり、花の水やり等利用者と生活を共にする視点でケアに当たっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会時日々の様子を伝える事で家族の思いを職員が理解できるようになり本人を支えるために施設の役割、家族の役割が明確に出来ている。本人の思いを必要に応じて代弁し家族の役割としてになって頂いている事も多い。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所前まで近所に住んでいた方が面会に来所されたり、昔一緒に仕事をしていた友人が毎月1・2回面会に来られたりと馴染みの関係が維持できている。施設として地域住民を広く受け入れ風通しの良い施設づくりに努めている。	併設のカフェや他事業所で、馴染みの人と一緒に過ごしてもらっている。家族の協力を得て、自宅、買い物や美容院に行く人もいる。携帯電話の充電支援をして、馴染みの人との関係が途切れないようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	耳が遠く会話が伝えにくい利用者には職員が間に入りながら会話が出来るように努めている。重度の利用者が増えるなかでも、ゆっくり出来る時間帯においてはグループで会話が出来るようにするなど入居者同士の理解ができるようにも努めている。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	終末期を迎え他界された後にグリーンケアを家族と行い個人の思い出を語り合っている。毎年行われる物故者慰霊祭で家族を招待し故人を共に偲んでいる。他界された利用者のご家族がボランティアとして施設との関係が継続している事もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々関わりの中で声掛け・言葉や表情、仕草などから本人の思いを聴く様努めている。本人からの発信が困難な場合においても強みモデルを活用しその人らしい生活を想像しながらケアを実施している。	居室や事務室など場所や時間を変えて、利用者の意向をゆっくり聞いている。傾聴ボランティアや言語聴覚士に聞いてもらう場合もある。困難な人には、表情や仕草を見たり24時間シートからの情報で推測している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族、ケアマネジャーから自宅での様子等を聴き、どんなこだわりがあったのか等生活スタイルの把握に努めている。環境が変わっても自宅での生活との落差がないよう支援している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	利用者一人ひとりの生活リズムを大切に、日々精神面、身体面の状況把握に努めている。利用者の「できる力」を職員間で共有し支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人・家族の意見を確認しつつケアプランを作成している。本人もチームの一員である理解のもと、入所オリエンテーション、カンファレンス等と一緒に参加して頂き「思い」が言える場を設けている。会議の場でケア内容や評価について検討している。	日々のケアのなかで利用者の意向を聞き、担当者会議は家族も出席し、意見を聞いて介護計画に反映している。毎月の会議で利用者の様子を話し合い、モニタリングしている。定期的・変化があれば、その都度見直しを行い、変更点は申し送りで伝えている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	パソコン入力の記録と言語での申し送りで職員間で共有し統一ケアが提供できるように心がけている。SOAP、ひもときシート、センター方式等も必要に応じて活用し根拠に基づいたケアが実践できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・家族からの要望に出来る限り「NO」と言わずオプションサービスを提示しながら要望に応えられるように努めている。農業祭へ一人で行きたいと要望があったさいも柔軟にオプションを活用し外出されたこともあった。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	理美容に関して地域の美容院のご協力を頂き髪をカット、毛染め等も行っている。地域の図書館の図書カードを作成したり、地域のスーパーへ利用者と一緒買い物に行く事も状況で取り組んでいる。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所になったからといって主治医を変更することなく主治医の継続も可能である事を伝えている。往診時に医師に伝える内容を職員間で話し合い、共有し状態報告している。訴えが出来る利用者は直接主治医との面談を行っている。	本人・家族の希望を聞き、かかりつけ医か協力医へ変更かを決めている。家族付き添いでの受診時は、日頃の様子や薬情報を書面で渡し、受診後に報告を受けている。希望で訪問歯科、訪問看護の利用ができる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の生活を支えるチームの一員として日常的に看護師との病状把握、状態把握を行っている。また、当施設の作業療法士とも連携し最適なケアを様々な視点から実施している。必要に応じて、受診や往診も行っている		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	様々な理由で入院した際にはサマリーを提供し情報共有に努めている。入院後はお見舞いに伺い状態の把握に努めている。出来る限り、退院時には退院カンファレンスを実施しスムーズな受け入れを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所契約時に事前指定書の記入を依頼し終末期について考える機会を設けている。状態低下に応じて都度カンファレンスを行い一緒に今後の方向性を確認しあっている。	状態変化に応じて医師が家族に説明し、意向の確認をしている。事業所での看取りを希望する場合は、多職種でターミナルカンファレンスを行い、情報を共有し介護計画を変更している。重度化しても他の利用者と触れ合えるよう車イスで移動し、食事摂取量にも配慮している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	年1回、緊急時の対応について勉強会を開き緊急時に動けるように取り組んでいる。法人独自のマニュアルを作成し、随時確認できる体制をとっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練を実施している。夜間時は夜勤リーダーを決めリーダーが指示を出せるようにしている。毎年職員は消火器、防火戸、散水栓の位置を確認している。運営推進委員会等を通じて地域の防災訓練にも参加している。	訓練前に避難経路、消火器設置場所、備蓄品保管場所等を事前確認し、実施後、反省点や感想を書いている。食料品以外にラジオ、ランタン、ヘルメットも常備している。訓練時に住民の協力が得られていない。	様々な機会に住民への協力を働きかけ、いざという時に協力体制がとれるよう期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	新生語録や十ヶ条をもとにやりがちなプライバシーへの配慮ミスが無いように繰り返し原点に立ち返る事を行っている。	利用者に合わせた声かけや対応を心掛けている。気になる声かけがあった時は、職員で注意し合っている。居室の表札は希望者のみ掲示している。接遇チェックシートで、身だしなみ、言葉遣い、態度等を振り返っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	説得ではなく納得いけるよう選択肢を提示した声掛けを心掛けている。施設での生活は選択する機会が軽減する為選択する機会の一つとして行事の参加や、食事の選択もできるように仕掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活リズムに合わせた支援を心掛けている。起床や就寝時間、食事の提供時間も統一ではなく必要に応じて変更し対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	筆筒に衣類をしまってしまうと必然的に職員が衣類を選択してしまいがちな為、準備できる利用者にはハンガーラックを準備し自身で衣類を選択できるようにしている。洗濯物を畳んだりしまったりする事も利用者と共に衣類への関心を持てるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑やベランダで出来た野菜を用い調理を行っている。状態が変化し最近では出来なくなったが、午後のティータイムのお茶菓子を利用者と一緒に調理したりもしていた。	行事食や選択食を取り入れ提供している。食材の皮むきや刻み、下膳等利用者ができることをやってもらっている。干し柿、ホットケーキ、おやき作り等もしている。食事中は音楽をかけ、楽しい食事時間にしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	24時間を通じて水分量を確認している。必要に応じて居室にお茶を準備しいつでも飲める様に整えたりしている。お茶をあまり好まない利用者に対しては、施設でお茶以外の物を提供したり、必要に応じて家族より嗜好品を持ち込んでもらい提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自身で口腔ケアが実施できる利用者には実施してもらえよう洗面所の環境セッティングを行い誘導を行っている。自身で行えない利用者に関しては舌下ブラシやスポンジブラシを使用したりうがいが出来ない利用者には食後お茶を飲んでもらうようにしている。		

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入所時に排泄のアセスメントを行い介入方法を共有している。おむつは最後の手段として可能な限りトイレでの排泄が可能となるように随時検討している。立位が取り難くともトイレでの排泄が出来るよう福祉機器の導入も作業療法士と検討している。	排泄チェック表からパターンを把握してトイレ誘導し、パッド種類の検討、トイレは厠を表示し自立に向けた支援をしている。立位がとれない人も離床移乗機や起立リフトを使用し、トイレ排泄ができるようにしている。紙パンツ使用から小パッド・布パンツになった人もいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	毎朝・起床時にヨーグルトや牛乳を提供し自然排便を促している。利用者の身体機能に合わせ「といれに座る」事を意識し、必要に応じて福祉機器を導入し安全に立位をとれる様に支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴機会を基本としながらも必要に応じて回数を増やしたり、入浴出来ない場合には足浴や清拭、入浴日の変更を柔軟に行っている。	利用者の状態や希望に合わせて、入浴形態、入浴順や湯温等に配慮している。好んで固形石けんを使用する人もいる。季節のミカン、柚、菖蒲湯で楽しみな入浴にしている。嫌がる人には、職員を変え声かけを工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の生活リズムに合わせる事を基本にし画一的なケアは行わない。病状で眠りにつくことが難しい場合には精神が安定するように温かい飲み物を提供したり音や臭いへの配慮、必要に応じて医療との連携も行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方された薬は看護師が確認し、介護職員が確認、服薬後も袋を捨てずに置いておくことで他の職員も服薬が確認できるようにしている。薬の服薬ミスがないよう、リスクの共有を行いリスクを繰り返さない様努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	利用者の出来る力、得意なことを日々の生活からアセスメントし利用者の役割が出来ている。無理のない様ねぎらいの言葉や感謝の気持ちを忘れずに伝えるようにしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節に応じて初詣・お花見・紅葉ドライブを計画し出かけている。天気の良い日は近所の花を見に行ったりしている。一時帰宅や病院受診を兼ねて外食をされる利用者もいる。	天気の良い日は散歩に出掛ける、洗濯物干しや花の水やり等で外気に触れる機会を作っている。季節に合わせて花見やドライブに出掛けている。家族の協力を得て、喫茶店や外食に行く人もいる。家族と本人が外出先で困らないよう、事前に排泄等への工夫をしている。	

リハビリセンター白鳥

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者自身でお金を管理している利用者もあり、施設内のカフェでコーヒーやパンなどを購入する機会もある。自身で管理が困難な利用者も使用する機会がないのではなく、必要に応じて金庫からお金を出して家族の面会や友人の面会時に金銭を使用している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を使用している利用者がおり自由に家族と連絡を取っている。電源が切れない様に確認をしている。家族に伝えたい事を面会時に伝えられるように職員同士でメモをとったりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設内での生活であっても季節を感じられるように花を飾ったり、カーテンを開け景色を見れるようにし、スタッフと会話を通じて季節を感じられるようにしている。食事の時間には音楽を流しゆっくりと過ごせる配慮を行っている。	リビングに行事写真や利用者の作品等を掲げ、季節の花や観葉植物を飾り話題が弾むようにしている。好きな場所に腰掛け、新聞や雑誌を読んだり、会話したりできるようにしている。定時の換気や次亜塩素酸水を24時間噴霧し、加湿や感染症にも配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人になれる空間や居室での空間など気分転換が図れる様に椅子やテーブルを設置している。ご家族の面会時、サロンの空間やカフェなどを利用しゆっくりできるスペースを提供している。施設全体で居場所を選択できるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時、布団や家具はご家族に自宅から持ち込んで頂き馴染みのある物を置いてもらう様にしている。利用者が使用しやすいようにベッドの向きや環境も自宅に近い状況を作れる様にしている。	使い慣れたチェスト、寝具類、時計等を持って来てもらっている。家族写真、お祝いの色紙、表彰状や自分の作品等を飾り、その人らしい居室にしている。使用できなくなっても化粧品や洗面用具も置いてもらい、ベッドの位置や向きにも配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手拭きのペーパーフォルダの位置を利用者が使用しやすいように設置したり新聞や週刊誌も自由に見れるようにしている。入り口や曲がり角が車椅子自乗時にぶつからない様に補強している。食事の椅子、テーブルも利用者の行動を妨げないように配慮している。		